

編 五ノ三十三

長官

副官



課長



課長



可及此所... 向... 案

秘出第百三十號

あふの... 向... 案

十二

0036

高橋のり子 海軍部印刷局

大正十一年六月廿五日

同ノ工用

明治十一年六月廿五日

0037

下雲第三拾七号

舊雲揚號破壞事件ニ付該艦々長

處断之義伺

舊雲揚號破壞事件ニ付該艦々長海軍

少佐滝野直俊遂審問別冊問答書ニ由

テ擬律候條罰文案相添此般相同候也

明治十一年五月二十一日

海軍裁判權評事甲藤為道

海軍中佐伊藤萬吉

海軍大佐林清康

海軍少將真木長義

海軍少將伊東祐磨

秘入第百七号

十三

秘六分

0038

海軍大輔川村純義殿

海軍

0039

審判官

海軍少將伊東祐磨

海軍少將真木長義

海軍大佐林 清康

海軍中佐伊藤高吉

海軍裁判權評事甲藤為直

別紙海軍少佐滝野直俊 舊雲揚號破壊

沈没事件答辨書ニ就キ擬律

軍律第百八十七條ニ准擬シ情法ヲ

酌量ス

閉門三十五日

0040

明治十一年五月

海軍少佐滝野直俊

舊雲揚號艦長在職中明治九年十月三十日該艦神戸工向航ノ際翌三十一日夜紀州阿田和浦海濱ニ接近シ終ニ破壊ニ臻ル其實况風雨猛烈止ムヲ得サル者アリト雖氏畢竟暴風怒濤ノ時ニ在テ左舷後艦ニ風ヲ受ケ前帆ヲ張り桁ヲ右舷ニ旋回スル僅ナリト雖氏風壓ヲ豫算セズ加之推測ヲ確信シ方位ヲ紀州大島ニ直指シ航路ヲ錯誤スル



(x)

科軍律第百八十七條ニ准擬シ情法ヲ
酌量シ開門三十五日被仰付

十五
原旨

0042

審判官

海軍少將

伊東祐磨

海軍少將

真木長義

海軍大佐

林清康

海軍中佐

伊藤雋吉

海軍裁判權評

甲藤為貞

書記

海軍少尉

木村信實

海軍三等屬

佐木定静

海軍裁判專書記

松尾暉利

問

明治九年十月三十日午後四時 舊雲揚艦横濱出帆

十六

海軍省

0044

翌三十一日 順風ニテ黎明神子元燈臺ヲ石舷ニ見航路
ヲ紀州大嶋ニ向テ西南六分一ニ針ヲ定メ航進ス
ト此時刻及ヒ其艦所在ノ経緯度幾ク及ヒ針位ノ直指
スル場所ハ凡何國何海岸若クハ何海嶋アリシヤ

答

明治九年十月三十一日黎明神子元燈臺ヲ石舷ニ

見航路ヲ南西六分一則(西南西四分一西)ニ定メテ
凡可推測算上テ以テ得ル處ノ艦所在ノ経緯度及ヒ其
時刻ハ航海日誌ニ登記シタレバ該日誌難破ノ際流失
セシニ因リ諳記スル不能而メ針位ノ直指スル處ハ海
図面ニ於テ紀州大嶋ノ燈臺ナリ

問

黎明トハ凡ソ何時頃ニシテ其時ノ風向ハ如何

答

黎明トハ日出前何時頃ナリシヤ諳記セスト魚尾凡

ソ午前四時ヨリ五時ノ間ナリシト想像セリ且ツ其時

ノ風位ハ「ビ」ナルゼウシトニシテ凡東風ナリ

問

其後同日午前八時御前崎ニ并行スト彼ノ神子元燈臺ト御前崎トノ間隔スル海里ニ航節幾テ及ヒ其船所在ノ経緯度幾テナルヤ

答

同日午前八時ニ於テ推測算用ヲ成シ船所在ノ経緯度ヲ得又既ニ航過シタル彼ノ神子元燈臺ト今併行シタル此ノ御前崎トノ間隔スル海里ニ航節等総テ航海日誌ニ記載シタルニ其日誌流失セシニ因リ諳記セス

問

其日誌流失シ依テ諳記セスト其氏大約ノ経緯度及距離航節幾テナリシヤ

答

其大約ノ経緯度及距離ハ今海図面ニ就テ推測スレハ凡ソ左ノ如クナル可シ併シ航節ハ日誌無キニ依

ヲ答フルヲ得ス

北緯 九三十四度十九分三十秒

東経 凡百三十八度二十分三十秒

御前崎ヲ距ル 凡十九里半

神子元ヲ距ル 凡三十四里半

問 又同日午後三時方向ヲ九木港一則西北七点四分

一ニ轉ス下此ノ時其艦所在ノ経緯度幾ナルヤ

答 同日午後三時方向ヲ九木港ニ指シ北西七点四分

一則(西微北四分一西)ニ轉セシ時ノ経緯度モ亦諸記セ

ス

問 其経緯度及ヒ九木港一ノ距離大約ノ数推測シテ

答フ可シ

答 北緯 凡三十三度五十六分

東經 凡百三十七度十三分三十秒

九木港ヲ距ル大約 四十八里ナリシ

問 九木港ニ方向ヲ轉スト該港ハ自ラ其模様ヲ熟知

セシヤ又ハ乘負中之ヲ熟知セシ者アリシヤ而シテ其距離

ヲ以テ推測セハ必ス日没後ニ至ラサレハ入港スル克

ハナラム然ルモ日没後タリトモ入港スル目的ナリシ

ヤ

答 直俊 未タ該港ニ入りシナレト虫氏雲揚彌ハ兩

三回該港ニ入りシヲアリ故ニ乗組士官川村中尉立見

少尉等其他下士以下ノ者共モ多ク之ヲ熟知セリ是ヲ

以テ仮令日没後タリ凡入港スルヲ得ヘレト議ヲ決シ

針路ヲ轉セシナリ

問 大島ニ直指スルノ針路ヲ九木港ニ轉セシハ該港

ニ入り艦、安全ヲ保ツノ見込アリシ事

答 始メ大島ニ直指スルノ針路ヲ九木港ニ轉シタルハ目的タルヤ暴風怒濤、際大島ニ進行スル其距離遠隔加フルニ風勢益々猛劇スレ兵更ニ減少スルノ目途ナレ故ニ寧ロ大島進行ヲ断念シ九木港ニ入り以テ艦ノ安全ヲ保タント議決實施セリ

問 又同レク四時三十分更ニ西南五点半ニ針路ヲ轉シ再ヒ大島ヲ向ケ航進スト此時其艦所在ノ経緯度幾チナルヤ

答 同四時三十分更ニ西南五点半則(南西微西ニ分一西)ニ針路ヲ轉シ再ヒ大島ヲ指ス時ノ経緯度モ亦諸記セス

問 其大約ノ経緯度及ヒ風向ハ如何

答 北緯 凡三十三度五十七分三十秒

東經 凡百三十六度四十二分四十秒

風向ハ「ゴートルウヤンド」ニシテ左舷ヨリ来ル

問 同日日没ノ頃四方ニ山嶽及ヒ海岬ヲモ見能ハカ

ルヤ又日没及ヒ午後八時其艦所在ノ經緯度ヲ測量セ
シヤ但又實測ニアラストモ推測セシヤ

答 同日日没前後風雨猛烈ニシテ山岳海岬共ニ視認

ノ得ス隨テ實測スル能ハカリ最モ午後八時ニ於テ
ハ推測算用ヲ成シ艦所在ノ經緯度ヲ得タレ凡 譜記セ

ス

問 大約ノ經緯度ハ如何

答 其日没ノ頃及ヒ同日午後八時ニ至リテハ今海圖

上ニ就テ推測スルヲ難シトス如何トナレハ當時ノ航

節ヲ諸記セシレハナリ

問

且ツ日ノ内九木入港ノ見込モ無之ニ紀カ大島迄

渡航可致ノ考量ハ日没後タリ氏大島ハ入港レ得ヘ

キ見込ナルヤ又ハ夜中ノ景況ニテハ其入港ヲ止メ漂

洋スルノ見込ナルヤ

答

針指ヲ九木港ニ向ケテ轉レ航過スル央風雨弥増

猛烈天色漸次ニ暝ク相成日没後ハ速ニ該港ヲ探テ入

ルベキ見込難相貫ト考量ニテ断然大島ノ燈臺ヲ依

頼レ以テ入港ス可ク方向ヲ左折セラ大島ニ向テ渡航

セシナリ

問

若シ大島へ入港レ得ヘキ見込ナル時ハ届書ニ追

追風南ニ廻リ夜ニ入り尤暗クト風ハ南ニ廻リ艦向ハ

五点半ニシテ「ガールス」一枚ナレハ必ス風下ニ流航シ其

0051

針位ノ向ヲ所ハ變ヒスト雖氏艦體ノ所在ハ自然ニ陸
地海岸ニ漂流スルノ憂アリ然ルニ「アールスル」一放ヲ
張テ「バイセウシト」ニ航行シ陸地ニ近接セ「カ」ノ目的
如何ナルヤ

答

御届書面ニ於テ追々風南ニ廻リ云々記載シタル
ハ其文意ノ能ク尽ス能ナル所ニシテ其本旨タリシヤ
風位ノ東方ヨリ南方ニ向テ僅ニ漸次移リ行クヲ言ヒ
頭ス為メノ意ニテ全ク實際ニ於テハ大島へ入港ス可
キ目的ヲ以テ方向ハ前頭ノ如クシ「カ」ルスル一放ヲ
揚ケテ暴風怒濤ヲ衝キ航進セシキ其一放ノ帆ハ「ポー
ト」ニシテ僅ニ「アールス」ラ船ニ曳キ張リタルノミ
ニ付全ク陸地ニ近接スルノ憂ハ一毛抱カカリシナリ
其陸地ニ近接スルノ憂ハ抱カカリシトハ何等ノ

問

事由アリシ事且ツ大島へ直指セシ方向ニハ風壓ヲ算
入セシ事

答 柳風浪暴激ノ際ト虽凡羅針ニ注意シ直指ノ針路
ヲ保持セシメ殊ニ風ハ「コトトル」ニシテ風壓ノ憂ハナ
シト信シタル故ニ風壓モ算入セスシテ大島ニ直指セ

問 然ラハ則何故ヲ以テ艦阿田和浦ニ漂着セシ事

答 其理由タル現今ニ至リテモ未タ之ヲ悟リ得ル能
ハサルナリ

問 風左舷ヨリ来リ然モ「カールスル」ヲ「ポート」トシニ
シテ「フレイ」スヲ右舷ニ引タリト云ハ「其時ノ「カール
スル」ノ作用ハ如何ナルモノナルヤ之ニ依テ思考セハ
其理由モ自ラ明カナラン事

答

然リ「ポルトテッキ」ノ「タールスル」ナレハ風壓ヲ生ス

可キ理アリト云凡當時ノ實際ニテハ右舷ニ「フリース」

ヲ引キレハ實ニ纜ニシテ風ハ「ゴートル」ナリ船ノ速力

ハ大ナルカ故ニ風壓ハ無キモノト思考セシナリ

問

其時ニ用ヒタル羅針ハ精巧ナル者歟且ツ從前ヨ

リ備ハリ在リシヤ或ハ當時始メテ備付タルヤ

答

然リ羅針ハ「スタンダルト」モ「スキーリ」モ精巧ノ

者ニテ從前ヨリ教實地ニ用ヒ當時ニ於テモ羅針ハ正

シキ者ト信スルナリ

問

羅針精巧且ツ風壓モナキトセハ其直指スル方向

ニ達ス可キハ理ノ當然タリ然ルニ該艦ノ直指所ニ達

セスレテ阿田和浦ニ漂着セシハ風壓ニ非スレテ他ニ

求ム可キ事由ナレ故令自己ノ考察ニテ風壓ナキ者ト

0054

スレ厄現ニ該艦ヲ阿田和浦ニ漂着セタルヲ以テ見レ
ハ其申立明瞭セス抑「カールスル」一枚ヲ張り左舷「カール
トル」ヨリ風ヲ受ケ加フルニ右舷ニ「フランス」ヲ引ク寸ハ
風下ニ漸々斜進セサルヲ得ス之レ航海術ノ最モ注意
ス可キ所ナリ然ルニ風壓モ算入セスレテ直指スル方
向ニ達セントハ實地行ハレサルナリ熟考レテ明瞭
ニ答フ可シ

答 及復熟考セシニ到底是迄陳述セシ如ク「アメリ」ス
ヲ強ク曳カサレバ「リ」ウ」ナキ者ト信セリ然レ厄該
艦直俊ノ預算スル所ニ背反シ其直指スル所ニ達セズ
レテ阿田和浦ニ漂着セシヲ以テ見レ「カールスル」一
枚ヲ張
リ「カール」トルヨリ風ヲ受ケ航進セシニ由リテ意外ノ「リ
」ウ」ナリシナラニ欲將前途推測上ニ違算有リシ欲此

両件何レ致原因スル事ト当今ニ至リ思考ノ畢竟直俊
ノ注意ノ行届カサレ所ナリ

問

若シ大島入港ヲ止メ漂洋スルノ見込ナル時ハ夜
ニ入テ四方ノ明暗ニ基キ此夜中山嶽若シクハ海島ヲ
識辨シ能ハサレ時ハ日没後又ハ夜入ノ後凡経緯度ヲ
推算シ洋中ニ方向ヲ変シ烈風巨浪ニ堪ヘ漂洋スレハ
陸地ヘ近接スルノ憂ナキニ似タリ然ルニ前知ノ考量
夜中ノ景況ニ依リ洋中ニ乗出シ漂洋セサルノ目的如
何ナルヤ

答

前ニ陳述セシ如キ況景ニテハ只管大島ノ燈明ヲ
依頼熱望シ暴風怒濤トハ虫氏其勢力ニ耐ユ可ク推量
シテ航進シ全ク入港ス可キ目的ヲ達ス可ク一途ニ考
定シ一モ漂洋ス可キ念慮ヲ起サレナリ

問

又同日午後十時二十分頃先見張ノ者航路之右舷ニ當テ山相見ト報ヲ得テ忽チ帆ヲ絞リ方向ヲ轉スト此時方向ヲ轉スルハ右舷舵ナルカ或ハ左舷舵ナルカ又此時艦長測量士官及當直士官ニ於テハ其以前何モ目撃シ得サルカ及見張ノ者ニ誰ソヤ抑見張ノ者幾人ニシテ其場所ノ定法アリシカ又蒸汽機械ノ運轉ト風ノ方向ト風力ト如何其他海岸若シクハ巖礁ニ對シ不虞ニ備フル方法ト如何

答

同日午後十時三十分頃先見張ノ者ヨリ航路ニ山相見ルノ報ヲ得ル以前艦長測量士官及當直士官ニ於テハ何レモ目撃セシ物ナク故ニ推測算上ニシテ只管大島ノ燈臺ヲ注目航行ス折柄前件報告ヲ得テ艦首ヲ左折スルノ目的ナリト（右舷）此時風向ハ追次南方ニ移リ

其力凡凡及十ノ間ニレテ又蒸汽機械ノ運轉ハ之ヲ徐々ニレタレバ轉數諸記セス艦ノ動搖強大ノ際空轉シテ其用ヲ為サス又見張ノ者ハ前甲板前檣樓一水兵一名宛配員ス殊ニ平素ヨリ位置セラレタル水兵次長宮本頼則ナル者恣テ前部ヲ注意セラレ依テ此時同人ヨリ前頭ノ如ク其報告ヲ得テ直ニ行進力ヲ減スル為ソニテアルスルヲ絞リ且ツ速ニ方向ヲ変スル事ヲ施行セリ

問 其山ヲ見ル丁凡ソ海岬ヲ距ル幾千海里ナリシヤ

答 其山ヲ見ル丁暴風雨朦朧ノ際海岸ヲ距ル凡ソ二

里内外ト思考セリ

問 一スクルリフパルチルノ蓋破壊スル以前其防禦

豫備ノ方法ハ如何

答 スクハリーエパー各ルノ蓋破壊スル以前リニグホ

ールトリニクボールトヲ綱ニテ結合シ固定セリ

問 綱ノ大小及結合ノ方法ハ如何

答 綱ハ姆指ノ太サニシテ而ノ其結合ノ方法ハ常法

ニ因レリ

問 錨ヲ卸ス時其海底淺深幾テ尋ニシテ凡海岸ヲ距

ル幾テ海里ナリレヤ

答 投錨以前不絶其海底ノ淺深ヲ測ラシメレニ巨浪

ノ為ノ難確認シト魚凡ハ尋ノ報告ヲ得レ時左舷錨ヲ

投入セリ而テ此ノ岸ヲ距ル凡壹里程ナリシ

問 海底砂利ニシテ阿田和浦ニ吹寄セラル、時幾テ

碇及錨鎖幾尋ヲ延用セシヤ

答 海底砂利ニシテ阿田和浦ニ吹寄セラル、時ハ既

ニ深淺ハ尋半ノ報告ヲ得シ時投シタル左舷錨ニ續テ
右舷錨ヲ投シテ合計ニ錨タリ而シ其錨鎖左舷ハ七十
五尋右舷ノ分ハ六十尋ヲ延用シタリ

問 錨鎖延用セルニ艦吹キ寄せテハ、際其錨鎖断
絶セシカ又ハ其錨モ亦艦ノ吹キ寄せテハ、ニ隨テ曳
キ来リレテ

答 錨鎖断絶セシニアラヌ海底砂利ノ為ノ錨終ニ止
マラス艦ノ吹キ寄せテハ、ニ隨テ曳キ来レリ

問 艦海底ニ觸ル、時種々ノ尽カトハ何々ノ手頃ヲ
ナセシヤ

答 艦海底ニ觸ル、前後ハ豫備ノ重錨ヲ取出シテ之
レヲ投スル用意シ又機械ヲ轉動セシメント欲シテ其
スクリル上ハバールニ巻キ着タル繩ヲ取除カント苦

0060

ミレ尋ナリ

問

艦内水充滿致ス時ハ何処ヨリノ原因ニレテ水入

ヲ始ノシマ然ル後終ニ艦體及ヒ帆檣ハ幾テ尺尋水上

ニ頭出レ尚總負檣上ニテモ倚立セシムルノ難易ハ如

何

答

艦内水充滿スルノ原因ハ其何処ヨリ入初ノシヤ

難確定シ虽氏既ニ「スタル」エバ「左」ハ「右」ノ蓋破壊セ

レヨリ海水ハ甲板上ニ入テ溢レ舷側ヨリハ激浪来襲

入突レテ甲板上諸処ヲ撃破シ且ツ固釘シタル天窓及

舷窓ヲ破碎シタルニ原キレカ而ノ終ニ艦體及帆檣ハ

浪退ケハ艦底ヲ現シ浪来レハ帆檣ノ中央ヲ打越シテ

總負ノ檣上ニ倚立スル丁ハ最モ難シト思考セリ

問

乗組一同上陸可致ノ令ヲ下ス時ハ陸地ニ近キ幾

シ

0061

于海里ニシテ此巨浪ニテモ上陸ノ難易ハ如何

答 乗組一同へ上陸可致ト令セシ時ハ前ニ陳述セル

續キノ況景ヲ以テ艦ハ既ニ濱渚ニ吹寄せラレ陸地ハ

眼前ニ在テ巨浪ノ退去ヲ窺ヒ揚陸スルハ寧ろ易シト

見込ダリ

問 陸地眼前ニアリトハ其距離幾テナリシヤ

答 當時艦ト陸地トノ距離ハ大約二十間程ト推測セ

レナリ而シテ其距離暴風雨止ムノ後ハ悉皆砂濱トナレ

リ

問 揚陸ノ令ヲ下ス已前ニ艦内乗員一同安全上陸ス

可キ方法充分其術ヲ尽セシヤ或ハ僥倖ヲ依頼シ上陸

ノ令ヲ下セシヤ

答 然リ緇ヲ陸地ニ通レ或ハ紙燕ヲ昇ス尋常法アル

氏雲揚艦破壞ノ際其方法ノ如キハ言フ可クシテ行フ
可カラズ實ニ急劇ニシテ艦ノ海底ニ觸ルヲ覺フマ
否ヤ巨浪一撃ノ為メ甲板上ノ諸具ハ殆ニト去ラレ艦
内ハ海水ト土砂一時ニ充滿シ縋ヲ出サントスルモ之
ヲ遂ル能ハサルヲ以テ止ムヲ得ス僥倖ヲ依頼シテ上
陸セレノタリ

問 必要ノ物品トハ何々ノ物品ナルヤ

答 必要ノ物品トハ

主上 皇后宮兩御寫真ヲ始メトシ艦ノ履歴暗号信号日
誌會計簿及諸目錄等ノ書帳類并金貨医薬入ノ胴乱磁
石海面船時計及測量器等ノ具類ナリ

問 航海日誌ハ艦ノ必要物品ニシレ無キヤ

答 然リ該日誌ハ最モ艦内ノ要具ナルヲ以テ測量專

任立見少尉ニ委託セリ同人之ヲ保護スル為ノ懷中
納メタルヲ直俊モ自ラ目撃セリ同人不幸ニシテ溺死
シ其屍モ出サレニ由テ該日誌モ供ニ流決ヒリ

問

端艇ヲ卸ス時ハ如何ナル方法ニテ卸セシヤ遂ニ

其端舟ハ如何ナリシヤ又乗員ノ有無ハ如何

答

端艇卸サント欲シテコトヲサプレ及之ニ添カシテ嚴

ニ固定シタル索ヲ解キコホートテークルオールニテ緩メ

巨浪來往ノ間臨機以テ卸サレノント發企シ右固定シ

タルクワイプ及索ヲ解キカ、リタル折柄巨浪中ノ一

巨浪來襲シ該艇中ニ乗移リタル木村愛吉、其艇ト共

ニ拂ハレ同一時「タビット」ノ下ニ在リシ者共モ亦其巨浪

ニ拂ハレテ去レリ

問

下士以下過半浪ノ際ヲ窺ヒ飛込揚陸スト之レハ

其飛込ニシテ者凡幾名ニシテ其内幾名揚陸セシヤ

答 下士以下浪ノ隙ヲ窺ヒ飛込揚陸スル際ハ暴風大

雨四方瞑ク之ヲ視認シ以テ救フル能ハサリシ就中自

身ニ亦巨浪ノ裡ニ出沒シ幸テ僅ニ生命ヲ存セシ

而已ノ現状ナリ

問 艦長及士官以下存生ノ者ハ飽迄「リギン」ニテ平和

ヲ待テ遂ニ和風平波ノ後揚陸セシヤ

答 艦長及士官ハ皆飽迄「リギン」ニテ平和ヲ待テ以テ

萬一ノ僥倖ヲ得ント決議セシト兪凡何分巨浪襲撃ノ

為ノ漸次拂ハレテ落没沈溺就死者多シ就中直俊ハ僥

倖ニシテ浪ニ撃シテ濱ニ卷上ラレタリ徳田盛芳上村

彦之丞ハ直俊既ニ落テ溺死セリト思考シ兩人協議シ

テ荒浪ニ飛込徳田ハ不幸終ニ溺死シ上村ハ幸ノ誘フ

所ニ依テ揚陸セリ既ニ浪ノ隙ヲ窺ヒ飛込ミタル下士
以下ノ諸員モ亦揚陸或ハ溺死セリ尤モ四等水兵坂本
鉄次而已獨「トップ」ニ登リテ身體ヲ固結シ平和ヲ待テ得
而後上陸セリ

問 士官ハ一人二人ト浪ニ拂ハレ入水ノ者ハ自ラ浪

上ニ飛込ミシレカ又ハ「ソギ」ニ在ル時全ク浪ノ為ノ拂
ヒ去ラレシヤ

答 前ニ陳述セシ如ク士官ハ「ソギ」ニ在ル可或ハ浪
ノ為ノ拂ハレ或ハ自己ニ飛込ミタル者アリシ

問 既ニ艦體岸摺リ最早揚陸ノ令ヲ下ス以前若クハ
以後汽笛或ハ旗燈若シクハ空砲ヲ以テ陸地ノ人ニ救
援ヲ求ムルノ方法其時ノ景況ニ依テ之ヲ辦理スル
ノ難易ハ如何

答

最早揚陸ノ令ヲ下ス以前ニ於テハ風波大難窮苦

ニ迫レトモ其救援ヲ求ム可キ号燈發砲等ノ方ヲ設ケ

ント欲スルモ艦ハ度外ニ動揺シ巨浪頻ニ襲撃シテ之

ヲ施為スル能ハス唯汽笛ヲ鳴セシ而已

問

横濱出船後紀州阿田和浦ニ岸摺マテノ航海線路

及ヒ其變向ノ所在地及ヒ岸摺ノ地位ヲ其航海ニ用ヒ

シ同海圖ニ記点シ其他風力風位天候ヲ別紙ニ記載シ

差出ス可シ若シ尚當時ノ航海圖及ヒ航海日誌ヲ所有

スレハ其終之ヲ差出ス可シ

答

横濱出船後紀州阿田和浦沖ニ到ル迄ノ航海線路

及其變向ノ所在地并ニ岸摺ノ地位ヲ其航海ニ用ヒシ同

海圖ニ記点シ其他風力風位天候ヲ今舉テ確乎明細之

ヲ記載スルハ甚難シ如何トナレハ其當時用タル海圖

并ニ書留ノタル日誌ハ共ニ流失セシ故ナリ加之該海
圖ハ英國龍動ニ於テ版行シタルモノナリト覺ヘト

ニ其年月番号等ヲ諳記シ能ハカレハナリ

問 羅針ノ差バレシニ及艦内鉄具ニ感スル羅針ノ

差ヲビレシニ幾子而ノ實測草稿アルヤ

答 羅針ノ差バレシニハ海圖面ニ示シタル物ニ依

リテビレシニハ實測シタルモノナレ氏其表紙流失シ

テ今之ヲ諳記セス其實測草稿モ流失セリ

問 海圖ハ何年何月何國ノ官版ナリシヤ

答 海圖ハ既ニ前ニ陳述シタル如ク英國龍動版ナリ

レト覺ヘドモ其年月等ニ至リテハ諳記セス

問 海圖ノ如キハ其艦船ノ命脉ニ関スル貴重ノ要品

タルヲ以テ及令其番号月日ノ如キヲ諳記セスト由氏

其年号ノ如キハ請記ス可キ筈然ルニ之レヲモ請記セ
カハ欲

答 然リ番號月日ハ請記セスト虫厄其年號ハ一千八
百七十年欲或ハ七十三年英國龍動ニ於テ出版セシ大
形ノ図ナリシ

問 海圖ニ航路ヲ指示シ航海日誌ニ據リ毎時若クハ
幾時毎ニ艦ノ所在ヲ海圖ニ標示セシヤ

答 海圖ニ艦ノ所在ヲ標示セシハ針路ヲ轉スル毎時
ト而ノ當直交代ノ毎時ナリシ

問 暗号書旗類航海日誌命令布告簿及ヒ會計諸簿ハ
如何ナリシヤ

答 取上ケ得テ乾燥シタル大ケノ旗類ハ紀州加田港
ニ於テ肇敏丸ハ諸物品ヲ引渡ス同時ニ之ヲ渡シ同様

ノ信号書及ヒ 秘密信號書等ハ歸着後東海鎮守府工収
納シ又命令布告簿及會計諸簿ハ残務為取調該府出勤
中天城艦艇裝掛幟命セシ時次頁ニ讓渡シタリ

問 艦觸岸ノ後毎日ノ形状ヲ日誌ニ記載セシヤ其日

誌ヲ出ス可シ

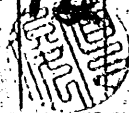
答 艦觸岸ノ後毎日ノ形状ニ日記シタリ則別冊ノ如

シ

石原富太郎ノ上陸手帳ノ様式

昭和二年

海軍少佐 藤野五郎



0070

漢
軍
考

0071